

死亡直前後に関する看護婦の調査から —— 儀礼および言葉を中心に ——

高 田 節 子

The Study of Nursing Care of Dying Patients and Their Families — Ritual Behaviors and Wordings of Nurses —

Setuko TAKATA

The purpose of this study was to obtain the basic data for the study of "Nursing care of dying patients and their families". I investigated 59 nurses working at hospitals in Tokushima know their ritual behaviors and their wordings that nurses and their families made for dying patients at moment of their death in the hospital.

The results were ;

- 1) Typically, two ritual behaviors were reported at attending patient's death. One was "Tamayobi"; calling dying patient's name to commend his soul to God or Hotoke. Other was "Matugo no mizu"; giving water to dying patient to sympathy him. Few nurses didn't know "Tamayobi". Many nurses knew "Matugo no mizu", however, only a few nurses did it in the hospital.
- 2) Nurses talked with their families in many ways around their last hours. This wordings included not only to explain dying patient's care, but also to alleviat the grief of their families much more.

Key Words : Tamayobi, Matugo no mizu

1 はじめに

近年の医療の進歩・発展は目覚ましく社会構造の変化・複雑化にともない在宅で死を迎えるようになった。死亡直前後は、人生最期を締め括る厳粛な時であるが、多様化する現代社会は、古くから伝わっている死の様式を家庭から施設へと変化させている。

死を受容している家族であっても、いざ臨終を迎えようと、悲嘆は倍増する。臨終に関与する看護婦の役割は、円滑に死が受け入れられるように働きかける必要がある。ターミナル・ケアについての研究は非常に進んでいるが、死亡直前後のあり方は余りなされてないのが現状である。そこで死亡直前後のあり方を研究する基礎的資料として看護婦に対して実態調査を行なったので報告す

る。

2 研究対象・方法

昭和62年2月1日から同3月31日までの間にT県公立病院および開業医に勤務する看護婦（准看護婦をふくむ）60名を対象に調査票を配布し回収した。回答は59名であり、回答率は98%であった。看護婦の経験年数は平均12年、臨終経験回数は平均27回であり、死後の処置を家族とともに行っていないのは、12名（20%）であった。

調査内容は対象である看護婦の概要を把握するための項目、1) 臨終の儀礼（風習以下略す）である(1)『魂よび(魂よばい)以下略す』(2)『末期の水』の項目、2) 印象に残っている臨終の場面の項目、3) 医師が臨終を告げた直後の家族の態度・言葉の項目、4) 臨終時、看護婦が家族にかける

言葉の項目、5) 死後の処置時の言葉の項目、(1)看護婦が家族にかける言葉 (2)看護婦が患者(遺体)にかける言葉 (3)家族が患者(遺体)にかける言葉、6) 臨終を経験して感じる項目についてである。

1) 臨終の儀礼については百分率であらわした。
2) 印象に残っている場面から6) 臨終を経験して感じることまでは意味内容を吟味して分類し、類似しているものを件数としてまとめ、ネーミングした。

3 結果と考察

1) 臨終時の儀礼

死者儀礼は、死生観・靈魂観・世界観によって大きく左右され、宗教およびその土地の風習によっても違っているが、その基本には、死者に抱く愛着の情と、また反対に死に対する畏怖という両極感情が共存している。残された者の愛着や悲嘆は、生活のうちに、追憶でもよいからいつまでも永続させたい力となり、一方畏怖は遺体に対する恐怖や嫌悪感をもち、死者と生者とを分離する力となって表われてきている。日本古来から伝わっている儀礼のうち、医療施設の病室で、現代的に行なえるものとしては、環境的・社会的にみて『魂よび』『末期の水』および『湯灌(死後の処置)』がある。死後の処置については、死亡後必ず行なっているから今回は略す。

(1) 『魂よび』

『魂よび』は死に旅立つ瞬間において、患者の名を枕元・耳元で呼び続けることである。表1-1に示すように、知っている33%、知らない67%であり、行なっている22%、たまに行なっている10%、行なっていない64%であった。家族が行なっていなければ家族の同意をえて教えるかについては教える25%、わからない36%、N A 39%であった。『魂よび』は死が差し迫ると、臨終の席に寄り集まっている人達は悲しみに包まれ、しばらく患者の名を呼ぶ。昔は地域によって屋根へ上り、また井戸に向かって、その人の名を呼んでいたよ

表1-1 臨終時の儀礼『魂よび(魂よばい)』

| 質問項目 | 結果 |
|--------------------------|---|
| 知っているか | 知っている33% 知らない67% |
| 行なっているか | 行なっている22% たまに行なっている10% 行なっていない64% N A 4% |
| 家族が行なっていなければ家族の同意をえて教えるか | 教える25% わからない36% N A 39% |

うである。死にゆく人の名を枕元、耳元でよぶことは自然にできる肉親との別離の情である。『魂よび』という難しい名称が付いているので知らないが67%もあった。だから家族が行なっていなければ、家族の同意を得て教えるが25%と低い。心の底から名を呼び続けることは医師が臨終を告げた直後の哀号であって、悲哀や喪失感を軽くし、臨終時に手を尽くした気持ちを深く感じさせる。

(2) 『末期の水』

『末期の水』は臨終から死の直後まで、死にゆく患者の口に水をふくませあるいは、綿棒などによって口唇を拭くことである。表1-2に示すように『末期の水』を知っていたのは83%と多く、行なっているかは行なっているは17%、たまに行なっている11%、行なっていない72%であり、行

表1-2 臨終の儀礼(風習) 『末期の水』

| 質問項目 | 結果 |
|--------------------------|---|
| 知っているか | 知っている83% 知らない17% |
| 行なっているか | 行なっている17% たまに行なっている11% 行なっていない72% |
| 家族が行なっていると参加するか | 参加する44% 参加しない26% わからない30% |
| 家族が行なっていなければ家族の同意をえて教えるか | 教える30% わからない60% N A 10% |
| 看護的な儀式としてとらえることについてどう思うか | そう思う29% 思わない34% わからない37% |

なっていないが最も多かった。では、家族が行なっていれば参加するかは参加する44%、参加しない26%、わからない30%であった。家族が行なっていなければ家族の同意を得て教えるかは教える30%、わからない60%、NA10%であった。看護的な儀式としてとらえることについてどう思うかはそう思う29%、思わない34%、わからない37%であった。『末期の水』を知っていたのは38%であるのに、実際に行なっていたのは28%と少なかった。また家族が行なっていなければ家族の同意を得て教えるかはわからないがもっとも多く、看護的儀式ととらえることについても、わからないがもっとも多かった。儀礼を行なうことで残さ

れる家族に死の現実を受け止めさせ、肉親の死に直面する心構えができるであろう。

2) 印象に残っている臨終の場面

看護婦の印象に残っている臨終の場面は、表2に示すように『さびしい死』がある。「家族に見放され一人さびしく死亡した患者のこと」などであった。次は『急変急死』した患者である。予期せぬ「突然死での家族の悲しみ」などがあった。次は『感謝をしての死』である。「集まっている人達にお世話になりました」といって死亡した患者のことなどであった。次は『患者と看護婦との関係』である。「あなたが夜勤のとき死ぬのなら死にたいと常に言っていたことが本当にそのよう

表2 印象に残っている臨終の場面

| 件数 | 内 容 | ネーミング |
|----|--|-----------|
| 8 | 家族に見放され一人さびしく死んでいった患者のこと | さびしい死 |
| 1 | 死亡してから連絡を下さいと家族に言われた患者のこと | |
| 1 | 死亡予定時刻から数日たつと寄り集まっている家族から死を待っている様子を示されたこと | |
| 1 | 自分の子供さえ連絡してもすぐ来院しなかったこと | |
| 1 | 家族がよく世話をしていたのに丁度不在時に死亡した患者のこと | |
| 1 | 遺体の引き取りに時間がかかったときのこと | |
| 1 | 主人に女の人ができ子供はその人になつき一人さびしく死亡した女性患者のこと | |
| 1 | 病院に来たのは父親だけで、このまま火葬場へ行くといつて退院されたこと | |
| 1 | 老夫婦が同室に入院し妻が死亡しているのに夫が気づかなかったときのこと | |
| 4 | 突然死での家族の悲しみ | |
| 1 | 注射後ショック状態になり、死亡した患者のこと | |
| 1 | 明日退院という日の朝、大きな呻めき声をあげて死亡した患者のこと | |
| 1 | 急に死亡し小さい子供だけが、後に残った患者のこと | |
| 4 | 集まっている人々に「お世話になりました」といって死亡した患者のこと | 感謝をしての死 |
| 2 | 背部から抱きかかえていると家族に「お世話になりました」といい後ろの私にも目礼されたこと | |
| 1 | 最期まで意識があり苦痛に耐えながら、看護婦に御礼を言って死亡した患者のこと | |
| 2 | あなたが夜勤のとき死ぬのなら死にたいと常に言っていたことが本当にそのようになった患者のこと | 看護婦との関係 |
| 2 | 生まれ変わったら一緒に生きていこうねといわれた患者のこと | |
| 2 | 最期まで意識があり苦しみぬいた患者のこと | 苦痛の中の死 |
| 2 | 死に対する恐怖と生への望みを持ちながら死亡した患者のこと | |
| 2 | 白血病の子供で苦痛を訴えながら死亡した患者のこと (自分の子供であったらと思うと耐えられない心境である。) | 幼い死 |
| 2 | 幼い子供の死(虫垂炎など)の、はかない命に涙した | |
| 2 | ICUで多種類の機械やチューブをつけながら死亡した患者のこと | 機械を装着しての死 |
| 2 | 人工透析室で透析中に死亡した患者 | |
| 1 | 「まだ温かいから、どうかして生きかえらせて下さい」と家族から言われたときのこと | 家族の懇願 |
| 1 | 「まだ温かいから早く助けて下さい」と看護婦の腕にすがって泣き叫ばれたときのこと | |
| 1 | 若いがん患者が亡くなり両親が医師にたいして不信感をもっていたときのこと | |
| 1 | 臨終時、主治医が患者の顔の上に大粒の涙を流したときのこと | 医師の態度 |

になった患者のこと」や、「生まれ変わったら一緒に生きていこうねといわれた患者のこと」があった。次いで『苦痛の中の死』である。「最期まで意識があり苦しめぬいた患者のこと」などであった。次は『幼い死』である。「白血病の子供で苦痛を訴えながら死亡した患者のこと」などであった。『機械を装着しての死』では「ICUで多種類の機械やチューブをつけながら死亡した患者のこと」などであった。『家族の懇願』では、「まだ温かいから、どうかして生きかえらせて下さいと家族から言われたときのこと」などであった。『医師の態度』では、「臨終時、主治医が患者の顔の上に大粒の涙を流したときのこと」と続いていた。印象に残っていた『さびしい死』は、肉親や友人に看守られず死亡した人たちである。人生最期の時を、親しい人々に看守られないことは、看護婦として死者に対する憐憫の情をわかさせ、十分なことができなかつた空しさを味わうものである。『急変急死』は、元気に退院することと思っていた患者が急死した驚愕であり、予期しない死である。『感謝をしての死』は最期迄意識が清明で、今死んでいるとわかっている患者であろう。寄り集まっている人達に感謝の言葉をのべ、死亡していくのは感銘を受ける。このことは、人々の希望や願望が印象につながったと思われる。『患者と看護婦との関係』での死は、両者の個人的なことであるが、患者との信頼関係のうえに成り立っている。『苦痛の中の死』は、苦痛を軽減することができなかつた看護婦の不全感が印象に残っている。『幼い死』は、子供であることが看護婦に憐憫の情をわかさせている。『機械を装着しての死』は、現代医学の発達にともない人間性を奪った医療の空しさを看護婦にいだかせている。『家族の懇願』は、患者と残される家族との別離の切なさ、愛しさが感ぜられ、手を尽くしてほしい感情がこめられて印象的な場面である。『医師の態度』では医師の素直さが感じられる。印象は心の中に強く残っていることだが、日常的な患者の死は忘却して、普段おこらないようなことが印象に残ったことであろう。『感謝をしての死』や『家族の懇願』は感動的であり、『さびしい死』『急変急死』『苦

痛の中の死』および『機械を装着しての死』からは、看護婦として人間尊重の自覚がうかがえ、職業意識の高さが示されたのであろう。

3) 医師が臨終を告げた直後

(1) 家族の態度・言葉

臨終は人生最期であるから家族や親しい友人が集まって別離をする厳粛な時である。死の宣告は、緊迫した雰囲気の中で医師より「ご臨終です」の言葉がかけられる。その直後の家族の態度や言葉は、表3に示すように『哀号』である。「大声で涙を流しながら泣きくずれる。声をこらして泣く」「一斉に遺体に取りすがって泣く」「名前を呼び続ける」などがあった。続いて『ケアへの感謝』である。「お世話になりました」「ありがとうございました」と感謝の言葉をかけて下さる。「最期まで手厚く見て頂きましてありがとうございました。本人も満足だろうと思います。」「苦しまずに逝けたことがよかったです」といって挨拶される。であった。次は『呆然自失』である。「だまって頭を下げる」「ボーッと立っている」「男性は黙って立っている」などがあった。次は『沈着冷静』である。「かえってほっとしているように見える人もいる」「老人の死では、家族は涙を見せても態度は落ち着いている」などであった。次は『連絡』である。「電話をかけに行く」「事務手続について質問する」であった。次は、『抗議』である。悲嘆のあまり「他に方法はなかつたですか」と抗議されるがあった。医師が臨終を宣告すると悲嘆は最高潮に達する。『哀号』や『呆然自失』は、残された家族の自然に表わす反応であり、悲哀感情である。医療施設内で『魂よび』も『哀号』も、共に表現できる環境づくりが大切である。

4) 臨終の言葉

看護婦が家族にかける言葉

医師が家族に臨終を告げた直後、看護婦は家族にどのような言葉がけをしているかについては、表4に示すように、一番多いのは『悔やみ』の言葉である。「お気を落とさないようにして下さい」「あまりお力を落とさないようにして下さい」「お気の毒でした」などであった。次は、『家族

表3 医師が臨終を告げた直後家族の態度・言葉

| 件数 | 内 容 | ネーミング |
|----------------------------|--|--------|
| 30 9 8 3 2 | 大声で涙を流しながら泣きくずれる。声をこらして泣く 一斉に遺体にとりすがって泣く 名前を呼びつづける 坐り込むようにして泣きくずれる 「そうですか」といって涙をうかべる | 哀 号 |
| 26 5 3 | 「お世話になりました」「ありがとうございました」と感謝の言葉をかける 「最期まで手厚く見て頂きましてありがとうございました。本人も満足だろうと思 います」と感謝の言葉をかける 「苦しまずに逝けたことがよかったです」といって挨拶する | ケアへの感謝 |
| 3 3 3 2 2 1 | 黙って頭をさげる ボーッと立っている 男性は、黙って立っている 表情も態度もかえず突っ立っている 何が何だか分からない様子でボーッとしオロオロしている 立ちすくんでいる | 呆然自失 |
| 2 2 1 | かえってほっとしているように見える人もいる 老人の死では、家族は涙をみせても態度は落ち着いている 近ごろは泣いている人が少なくなった | 沈着冷静 |
| 3 2 | 電話をかけに行く 事務手続について質問する | 連 絡 |
| 1 | 悲嘆のあまり「他に方法はなかったですか」といって抗議する（治療） | 抗 議 |

表4 臨終時の言葉 看護婦が家族にかける言葉

| 件数 | 内 容 | ネーミング |
|-----------------------|--|----------------------|
| 7 6 5 2 2 | 「お気を落とさないようにして下さい」 「あまりお力を落とさないようにして下さい」 「お気の毒でした」 「おつらいでしょう」 「ご愁傷さまでした」 | 悔やみ |
| 7 3 3 2 2 | 「よいお世話をなさいました」 「よく頑張られました」 「ご苦労さまでした」 「お疲れ様でした」 「長い間大変でした」 | 家族に対す る労のねぎ らい |
| 6 5 | 「ゆっくり、さようならを言ってあげて下さい」 「大変でしたね。お別れを言ってあげて下さい」 | 遺体との別離 |
| 5 3 | 「本当に残念でございました」 「精一杯お世話をさせて頂きましたが、どうもいたりませんでした」 | 看護婦の残 念な気持ち |
| 4 | 「お別れが済めばお拭きします」 | 死後の処置 の説明 |
| 1 | 「しっかりなさって下さい」 | 激励 |
| 17 | (黙って頭を下げる) | 無言 |

に対する労のねぎらい』である。「よいお世話をなさいました」「よく頑張られました」「ご苦労までした」などであった。次は、『遺体との別離』である。「ゆっくり、さようならを言ってあげ下さい」などであった。次は、『看護婦の残念な気持ち』の表われである。「本当に残念でございました」「精一杯お世話をさせて頂きましたが、どうもいたりませんでした」であった。次は、『死後の処置の説明』である。「お別れがすめばお拭きします」であった。次は、『激励』である。「しっかりなさって下さい」であった。最後は、『無言』である。(黙って頭を下げる)であった。

5) 死後の処置時の言葉

(1) 看護婦が家族にかける言葉

死後の処置時、看護婦は家族に対して、どのような言葉を使っているかについては、表5-1に示すように一番多いのは『家族の労をねぎらう言葉』である。「家族の方がよくお世話をされたので感謝していると思いますよ。」「今までのお世話と気落ちでお疲れが出ませんようにご自分のお体にもお気を付け下さい」などであった。次は、『遺体を褒めたたえる』である。「安らかなお顔をしていますね」「辛抱のよい人でした」「立派な最期でした」であった。次は、『死後の処置の説明』である。「最期にきれいにしましょうね」「今から

身体をきれいにしますから一緒にしませんか」であった。次は、『忍ぶ話題』である。(好き好んでいたことを思い出して話をします)(元気な頃の話の聞きだす)であった。次は、『悔やみ』である。「寂しくなられましたね」であった。次は、『看護婦の残念な気持ち』である。「あまりお役に立てなくて残念です」であった。次は、『無言』(黙って頭を下げる)であった。

(2) 看護婦が患者(遺体)にかける言葉

看護婦は患者(遺体)にどのような言葉を使っているかについては、表5-2に示すように『苦痛に耐えたねぎらい』である。「えらかったなあ」「よく頑張ったなあ」などであった。次は、『これから逝くであろう死後の世界への希望』である。「よいところへ行って下さい」「安らかに眠って下さい」などであった。次は、『行なっている死後の処置の説明』である。「悲しいけれど、きれいにしましょうね」「体を拭いておきましょう」などであった。次は、『帰宅への促し』である。「さあ家へつれて帰ってもらおね」であった。次は、『賛辞』である。「優しい顔をしている」などであった。次は、『無言』である。(何もいわない)であった。

(3) 家族が患者(遺体)にかける言葉

家族は患者(遺体)にどのような言葉を使って

表5-1 死後の処置時の言葉 看護婦が家族にかける言葉

| 件数 | 内 容 | ネーミング |
|----|--|--------------|
| 20 | 「家族の方がよくお世話をされたので感謝していると思いますよ」 | 家族に対する労のねぎらい |
| 8 | 「今までのお世話と気落ちでお疲れが出ませんようにご自分のお体にもお気を付けて下さい」 | |
| 2 | 「長い間お疲れ様でした」 | |
| 15 | 「安らかなお顔をしていますね」 | 遺体を褒めたたえる |
| 4 | 「辛抱のよい人でした」 | |
| 3 | 「立派な最期でした」 | |
| 5 | 「最期にきれいにしましょうね」 | 死後の処置の説明 |
| 5 | 「今から体をきれいにしますから一緒にしませんか」 | |
| 3 | (好き好んでいたことを思い出して話をします) | 忍ぶ話題 |
| 3 | (元気な頃の話の聞きだす) | |
| 5 | 「寂しくなられましたね」 | 悔やみ |
| 3 | 「余りお役に立てなくて残念です」 | 看護婦の残念な気持ち |
| 5 | (黙って頭を下げる) | 無言 |

表5-2 死後の処置の言葉 看護婦が患者(遺体)にかける言葉

| 件数 | 内 容 | ネーミング |
|------------------------------|---|---------------------|
| 20 17 2 1 1 1 | 「えらかったなあ」 「よく頑張ったなあ」 「最期まで頑張ってご苦労さまでした」 「苦しかったなあ」 「こんなになって苦しかったなあ」 「これからは楽になってね」 | 苦痛に耐えたねぎらい |
| 8 5 1 1 | 「よいところへ行って下さい」 「安らかに眠って下さい」 「天国へ行って下さい」 「お花畑が一杯あるところへ行って下さい」 | これから逝くであろう死後の世界への希望 |
| 11 2 5 | 「悲しいけれどきれいにしましょうね」 「体を拭いておきましょう」 (生きている人と同じように〇〇さん〇〇しましょうねといいます) | 行っている死後の処置の説明 |
| 7 | 「さあ家へつれて帰ってもらおーね」 | 帰宅への促し |
| 2 1 1 | 「優しい顔をしている」 「我慢強い人でした」 「好人でした」 | 賛 辞 |
| 1 | (何も言わない) | 無 言 |

表5-3 死後の処置時の言葉 家族が患者(遺体)にかける言葉

| 件数 | 内 容 | ネーミング |
|----------------------------|---|---------------------|
| 18 14 10 7 5 | 「よく頑張ったなあ」 「これで楽になったなあ」 「えらかったなあ」 「苦しかったなあ」 「長かったなあ」 | 苦痛に耐えたねぎらい |
| 14 | 「早く家へ帰ろう」 | 帰宅への促し |
| 2 2 2 2 2 2 | 「いいところへ逝きなよ」 「成仏してね」 「子供を見守ってやってね」 「後のことは心配しないで」 「〇〇さんと会えるわ」 「あの世で〇〇さんに会いなよ」 | これから逝くであろう死後の世界への希望 |
| 8 | 「きれいにしてもらおうね」 | 死後の処置の説明 |
| 3 2 | 「きれいな顔している」 「寝顔のようね」 | 賛 辞 |
| 5 | (黙っている) | 無 言 |

いますかでは、表5-3に示すように、『苦痛に耐えたねぎらい』である。「よく頑張ったなあ」「これで楽になったなあ」「えらかったなあ」などであった。次は、『帰宅への促し』である。「早く家へ帰ろう」であった。次は、『これから逝くであろう死後の世界への希望』である。「いいところへ逝きなよ」「成仏してね」などであった。次は、『死後の処置の説明』である。「きれいにしてもらおうね」であった。次は、『賛辞』である。「きれいな顔している」であった。次は、『無言』である。(黙っている)であった。

以上4)から5)-(3)までは、死亡直前後の約1~3時間における看護婦や家族が話し合っている言葉を調査した結果である。死を予期し、受容したとみえた家族や看護婦であっても、とりわけ、臨終時は悲しいものであり、緊迫した空気に包まれる。臨終経験の少ない看護婦では、人の死という厳粛ないとなみを前にして、特別な言葉や忌み言葉があるのかと考えていると、必要な言葉がけができない場合がある。前述のように死の宣告時のネーミングは、『悔やみ』『家族に対する労のねぎらい』『遺体との別離』『看護婦の残念な気持ち』『死後の処置の説明』および『激励』であった。『悔やみ』は特別な用語ではなく社会一般、日常に使っている言葉であった。『家族に対する労のねぎらい』は、家族が長い間付き添って世話した場合、看護婦の言葉がけに対して家族の心もなごむものである。『遺体との別離』は、家族の気持ちを和らげ、死後の世界へ導くという点から死に直面した心構えを現実として受け止めさせようとする言葉であろう。『看護婦の残念な気持ち』は素直に表現して、家族の悲嘆を少なくするように心がけている。『死後の処置の説明』は、看護業務として最低必要な言葉である。

次に、家族との別離の時間が済めば死後の処置を行なうが、そのときの言葉のネーミングでは(1)の看護婦が家族にかける言葉として、『家族に対する労のねぎらい』『患者(遺体)を褒めたたえる』『死後の処置の説明』『忍ぶ話題』『悔やみ』『看護婦の残念な気持ち』であり、家族の心残りがないように手厚く看護したと思える言葉がけを

している。この言葉は悲嘆をより少なくすると考える。(2)の看護婦が患者(遺体)にかける言葉と(3)の家族が患者(遺体)にかける言葉は件数が異なるが同じ項目であり『苦痛に耐えたねぎらい』『帰宅への促し』『これから逝くであろう死後の世界への希望』『死後の処置の説明』および『賛辞』であった。反応のない遺体を主人公において、言葉をかけても、わからないと知りつつ、看護婦も家族も話しかけている。もし、家族が話しかけない場合は、看護婦が話しかけるよう誘導することによって悲嘆をより少なくするとうかがえる。『無言』については、『無言』の解釈は難しい。敬虔な無言の態度も望ましいが、残される家族の立場を思い、家族のニーズにあった適切な言葉を用意した対応が必要であろう。

患者が死亡すれば、後は看護の仕事ではないといわれることがあるが、今回の調査では、残される家族を思い、死後の患者の処置のみに終るのではなく、患者の生きてきた道程、厳粛な死の状態の受け入れ、そして、これから逝くであろう死後の世界のことや残される家族の身の上にも話題が及んで豊富な言葉がけがされているとうかがえた。

6) 臨終を経験して感じること

表6のように、一番多かったのは、『生命の尊厳』である。「生命の尊さ、大切さを再認識する機会である」「生命のはかなさ、有難さを知る」などであった。次は、『看護ケアの反省』である。「この人にとって自分が行なったケアは、これで良かったかしらと反省させられる」「形式的になっていることもあり、反省させられる」などであった。『生命の尊厳』と『看護ケアの反省』では、専門職業人としての意気込みが感じられる。このことは、使命感の表われであり、臨終を経験することで看護の質をたかめていると思われる。次は、『自己の生き方の参考』である。「自分の気持ちのもち方、人生の過ごし方を教えられる」「何事も中途半端にして生きてはいけなように思われる」などであった。臨終を経験することは、やがて、自分も死ぬ運命だと再認識し、死生観を強くしている。次は、『家族との絆』である。「た

表6 臨終を経験して感じること

| 件数 | 内 容 | ネーミング |
|----------------------------|---|-----------|
| 14 4 2 2 1 | 生命の尊さ、大切さを再認識する機会である 生命のはかなさ、有難さを知る 人の命の重さを実感し、臨終の場に仕えることは看護婦として励みになる 人生の節目である生と死に私たちのような未熟なものが立ち会っていることについて大きな責任を感じる。 遺体に手を合わせると、その人と心が一つになったようで生命の尊さを感じる | 生命の尊厳 |
| 9 2 2 1 | この人にとって自分が行なったケアはこれでよかったかしらと反省させられる 形式的になっていることもあり反省させられる 死に旅立つための看護について考えさせられる もっと苦痛をとってあげられなかったかと強く反省する | 看護ケアの反省 |
| 3 2 2 2 | 自分の気持ちの持ち方、人生の過ごし方を教えられる 何事も中途半端にして生きてはいけないように思われる 自分の生き方や死のあり方について考えさせられる 自分もやがてこのようになるから現在を大切に精一杯生きたいと思う | 自己の生き方の参考 |
| 2 2 2 1 1 1 | たとえ、肉体を失ってもその人は家族の心のなかに存在する 残された家族の生き方にどのような手助けができるか考え込んでしまう 家族との関わりの難しさを学ぶ機会である 人の本当の姿(残された家族)をみることができるように思う 家族の存在の大きさを知る 家族を元気づけてあげたいのに、関わる時間がなくて残念である | 家族との絆 |
| 2 2 2 2 | 職務上致し方ないが、臨終に立ち会うのはもうこりごりである 家族の悲しみを考えるとあまり経験したくない 早くこの場から立ち去りたい気持ちを抑えているのが本音である 人生の一番暗い場面だから考えこむと自分の人生も暗くなってしまう | 臨終の場からの逃避 |

とえ、肉体を失ってもその人は家族の心のなかに存在する」「残された家族の生き方にどのような手助けができるか考え込んでしまう」「家族との関わりの難しさを学ぶ機会である」などであった。死者が愛され、称えられているという確信を残された家族がもつことで、悲嘆は少なくなると思われる。次は、『臨終の場からの逃避』である。「職務上、致し方ないが、臨終に立ち会うのはもうこりごりである」「家族の悲しみを考えるとあまり経験したくない」などであった。逃避については、前述の両極感情のうち畏怖や嫌悪感のあらわれであろう。職務上致し方ないことだが、人の死にたちあう正直な気持ちである。

以上『生命の尊厳』『看護ケアの反省』『自己の生き方の参考』『家族との絆』『臨終の場からの逃避』について、幅広く5項目にネーミングできたが、『臨終の場からの逃避』を除けば、臨終を経験することにより、生命の尊厳への認識を強く

し看護の役割の重大さや自分の人生について考える機会となっている。

おわりに

臨終に関与する看護婦は、残された家族に対して、肉親の死を円滑に受け入れられるような援助が必要である。厳粛な死を前にして死んでいった患者の心と、残された家族の心とが最もよい状態で固く結ばれ、その橋渡しができる儀礼および言葉がけが看護婦に期待される。今回は、看護婦に対して死亡直前後の調査を行なったが、残された問題として家族は看護婦に対してどのように感じ、受け入れているかを調査したい。

ま と め

医療施設内での死亡直前後のあり方を検討する基礎的資料としてT県公立病院および開業医に勤務する看護婦59名を対象に看護婦や家族が行なっ

ている儀礼および話し合っている言葉を調査した。

1. 看護婦が行なえる臨終時の儀礼は、『魂よび』および『末期の水』があり、『魂よび』を知らない人は多く、『末期の水』については、知っている人が多いのに、行なっているのは少なかった。
2. 死亡直前後において、看護婦や家族が話し合っている言葉には、死後の処置の説明以外に残され

る家族の悲嘆をより少なくすると思われる豊富な言葉が使用されていた。

要旨は、第9回・11回・12回の死の臨床研究会において発表した。

参 考 文 献

- 1) 宮家 準：生活の中の宗教. NHKブックス, 1982
- 2) 渡辺照宏：死後の世界. 岩波新書, 1977

(1990年10月31日受理)